



～ 夢ひとすじに ～

宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 26 年度 特別号
平成 26 年 12 月 24 日 (水) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「典子は、今」

校長 やました 山下 せいじ 誠二

私が教師の道を歩き始めた 1981 年、松山善三監督よって製作された『典子は、今』というドキュメンタリー - 的な映画を見に行ったことを思い出しました。この映画は、身体障害者の方の社会参加を力強く訴えた作品として注目されました。この白井典子さん(旧姓 辻典子さん)は、熊本出身で、私が通学していた高校の近くの中学校に在籍していました。お母さんは看護師。眠れないため睡眠薬を常用していたところ、サリドマイドが入っていたのです。典子さんが生まれたのは 1962 年 1 月 27 日。母親と赤ちゃんが対面したのは、なんと生まれてから 50 日目。ひじから先がなく、指は切除されていました。子どものころの典子さんは、まったく手のかからない子どもでした。いい子にしていけないと母親から見捨てられるかも・・・と子ども心ながらに自己防衛していたのかもしれませんが。両親は、典子さんが生まれてから離婚。この世に頼れるのは母親ひとりきりですから、その母親に嫌われないよう、いい子にふるまっていたのではないかと・・・。後に出版された本には、そう書かれています。典子さんは足で何でもできるようになります。この映画の中で、私が一番印象に残っていることは、両足を器用に使って針に糸を通したり、足と口を使ってミシンを使いこなすシーンです。母親は、それを褒めて、褒めまくりです。足で絵を描くと、「うまいね、芸術家だね」そう褒めます。小学校に入学するのも一騒動でした。養護学校には断られ、結局、小学校の校長先生の理解により入れたのですが、昼休みの時間には、毎日母親がトイレの介護に来なければなりません。学校でのトイレは一回だけという大変なことです。それを中学、高校まで一日も欠かすことなく母親は続けました。母親の努力に頭が下がる思いです。典子さんは中学生のとき、友だちの心ない言葉に傷つきました。言った本人は自覚がなかったのかもしれませんが・・・。その体験から本には、眼が沈んだ子どもを見かけたら、優しい笑顔で、そっと「だいじょうぶ」とささやいてあげてください、とも書かれています。やがて高校を卒業して熊本市役所へ就職し、サリドマイド被害者として全国で初めて公務員へ。翌年には運転免許を取り、1983 年に障害者のサ - クルでボランティアをしていた現在のご主人と結婚、翌年に長女を出産されました。それからは一切の取材を断られていましたが、子育てが一段落した 40 歳過ぎから心境に変化が現れ、自分を客観的に見つめられる余裕ができ、約 25 年間勤めた熊本市役所を退職されたのをきっかけに、障害者の力になりたいと講演活動を始められました。テレビのインタビュー - 中で、典子さんは、普通の学校へ行けたこと、働く場所を与えられたことがとてもうれしかったと触れています。そして、「もし今、腕があったら」という質問に、そばにいる長男の亮平君を見て、「抱きしめたいですね」と言われました。この言葉は、子どもへの愛情いっぱいあふれる気持ちを表しており、また、かなわぬ母の切ない願いでもあると思います。子どもは日々成長します。子どもが、何らかの障害に出会った時、一緒に考え、困っていたら「抱きしめてあげる」そんな親って素敵ですよ。

全国駅伝大会は、インフルエンザに見舞われるアクシデントの中、生徒たちは懸命に走りきりました。応援していただいた地域の皆様、卒業生、在校生をはじめ、多くの皆様のご支援に感謝いたします。